

函館地方の緑化樹の害虫（ ）

館 和 夫

広葉樹類の害虫

函館地方の緑地に生立する樹木類は、函館造園研究クラブの調査によれば、39科140種におよび、その80%は広葉樹であった。それらに近年発生した害虫の一部について、形態や生活史、防除方法などを簡単に紹介する。

ポプラ・ヤナギ類

セグロシャチホコ

改良ポプラの植だめなどにときおり大発生して、全葉を食べ尽すほどの被害をおこす。老熟幼虫は体長35~40mm、背面は黒色で2ヶ所に同じ色のこぶ状突起があり、両側には黄線、胸部背面に赤色斑、腹部背面には2列の小白斑がある。函館地方では年2世代で、6月上・中旬および8月中旬~9月下旬に羽化するものが多い。とくに秋期、中齢以後の幼虫の食害が著しいが、ふつうはそれによって枯死するようなことはない。若齢幼虫で粗皮の下や木の根元などにひそみ集団で越冬する。

防除方法は幼虫分散前に枝葉を切りとって焼却するとよいが、それ以後はディブテレックスの4%粉剤または乳剤の1,000倍液などを散布する。

ヤナギシリジロゾウムシ

山間部のポプラや川沿いのヤナギなどに多くみられるもので、体長8~10mmの成虫は「シリジロ」の名のとおり黒褐色の上翅の尾端が白い鱗毛に覆われている。年1世代で卵越冬といわれるが、生活史はかなり不規則で、成虫や蛹で越冬しているものもある。幼虫は夏に寄主の枝や幹の髄芯部に直径5mm前後の坑道を穿ち、木屑を排出するので被害がよくわかる。

防除方法は、穿孔内部にスミチオン乳剤の50~100倍程度の濃厚液を注入するとよい。

これらのほかに、8月頃葉の上に頭を並べて食害するポプラハバチや、地際の樹皮下を環状に穿孔するコウモリガの幼虫などがある。また、ドロノキには大型で赤い翅色の美しいドロノキハ



写真-1 セグロシャチホコ
の終齢幼虫

ムシや、葉に袋状の虫えいをつくるドロハタマワタムシなどが寄生することもあるが、実害は少ない。

カンバ・ハンノキ類

シラカバノクロホシハモグリハバチ

近年めだってきた潜葉性害虫の一種で、5月から10月頃までに数世代をくり返し、葉の表皮下組織を食害する。被害葉の斑状の潜孔はしだいに拡大し、後に褐変して早期に落葉する。加害期間中、半透明に浮き上がった表皮を透して内部にいる幼虫や散在する虫糞を観察することができる。

なお、ほかに加害形態が類似する害虫としてスイコバネガの一種があり、その場合は虫糞が糸状に連なっているので判別できる。

防除方法としては、幼虫の孵化期に硫酸ニコチン剤の1,000倍液やスミチオン乳剤の800倍液程度のものを用いるとよい。また、園芸的にはシラカンバに強度の剪定をしたり、技下高を高くしたりして被害があまり目立たないようにしている例もある。

ハンノキハムシ

ハンノキ類の一般的な害虫で、成虫、幼虫ともに加害する。年1世代で成虫の体長は8～9mm、紫藍色でつよい光沢をおびる。秋に羽化した成虫は葉を食害したのち落葉の下などで越冬し、春、開芽とともにふたたび摂食してから葉の上に産卵する。孵化した幼虫は6～7月を盛期として葉を網目状に食害し、老熟すると落下して土中で蛹化したのち、8～9月に羽化する。

防除方法は5、6月頃の成虫、および若齢幼虫に対してデナポンやダイアジノンの粉剤、または液剤の1,000～2,000倍程度のものを用いる。

ゴマダラカミキリ

ハンノキやシラカンバのほか、ポプラ、ヤナギ、プラタナス、カエデなども加害する穿孔虫で、光沢をおびた黒色の翅の上に白い斑点が散在する。成虫の体長は雄が22mm、雌が30mm前後で雌の方が大きい。触角は雄の方が長く、体長の2倍近くに達する。2年に1世代で、樹幹内に幼虫で越冬し、寄主の幹の下部を長軸方向に穿孔・加害したのち8月頃に羽化する。

防除方法としては成虫を捕殺したり、産卵防止のため幹の下部にトタン板を巻く方法が有効であるが、薬剤を用いる場合は羽化前に寄主の根元付近にスミチオンの200倍液を2回程散布してやるとよい。



写真-2 ハンノキから羽化したゴマダラカミキリ

ウメ・サクラ類

オビカレハ

幼虫は別名ウメケムシ，テンマクケムシといわれ，リンゴ，サクラ，アンズ，ヤナギなどに一般的な害虫である。年1世代で，小枝に帯状に産みつけられた卵で越冬する。春，孵化した後，灰白色の糸を吐いて天幕状の巣をつくりその中に群棲し，夜に葉を食害する。老熟幼虫は灰青色で，背面中央の白線をへだてて2本の橙黄色の線がある。分散後は日中も加害し，6月頃樹上に黄白色のマユをつくり2週間ほどの蛹期を経て7月上・中旬に羽化する。



写真-3 オビカレハの越冬卵



写真-4 オビカレハ終齢幼虫

防除方法は越冬卵や天幕状の巣を集めて焼くのがよいが，薬剤による場合はスミチオン乳剤または幕和剤，DDVP，エルサン，ディプレックスなどの乳剤の各1,000倍液を早期に散在するのがよい。

ウメシロカイガラムシ

クワシロカイガラムシの近縁種で，ウメ，サクラなどの枝や幹に，直径1~2.5mmの白色のカイガラを多数形成する。成虫越冬で，本州方面では年3世代をくり返すといわれるが道内の生活史の詳細はまだ明らかでない。

防除方法としては冬期に被害枝を切除するかまたは毛足のかたいブラシでこすり落すのがよいが，薬剤を使用する場合はジメトエート乳剤，スプラサイド乳剤などの1,000~1,500倍液をカイガラ形成前（5月下旬）にかけてやればよい。

サクラフシアブラムシ



写真-5 サクラフシアブラムシの虫えい

6月頃サクラの葉の上に見火ぶくれのような鮮紅色の袋状の虫えいをつくる害虫で，美観上問題にされるものである。卵越冬で展葉期に葉に寄生して虫えいを形成したのち夏寄主のヨモギに移動する。秋，有翅雄虫および有翅雌虫がサクラに復帰し，交尾・産卵する。

防除方法としては、開芽期にエカチン乳剤、エストックス乳剤の1,000倍液を散布するのが有効とされている。

そのほかサクラに寄生するアブラムシとして被害が目立つものには、ヤマザクラの新梢部に多いサクラコブアブラムシがある。被害部分は紫紅色をおびてちぢんで硬くなる。防除方法は前種とおなじである。



写真-6 サクラコブアブラムシの虫えい

エゾシロチョウ

1976年、1977年の初夏に函館市の五稜郭公園のソメイヨシノに大量に発生して話題になったもので、成虫は大型の美しい蝶である。年1世代で老熟幼虫は体長約4cm、背面は黒色で両側に黄土色の線がある。5月～6月に大きい被ごとに集団で葉を食害したのち、被上に黄白色で多数の黒斑をもつ蛹をつくり、6月上・中旬に羽化する。

防除方法は被害枝の切除焼却、および有機燐剤等の早期散布である。

コスカシバ

ソメイヨシノなどサトザクラ類の若木に多い穿孔害虫で、年1世代、名のように成虫の翅は透明で腹部に一見八ちに似た黄色い2本の横縞がある。幼虫は枝のつけ根や幹の樹皮下を穿孔、加害するので被害木の坑道の入口からはヤニや虫糞が多量に排出される。生活史はかなり不規則であるが、函館地方では6、7月頃に主として加害し、8月末から9月にかけて羽化するものが多い。

防除方法は坑道を切開して幼虫をとり出したり、針金などをさしこんだりして殺すか、またはスミチオンなどの50～100倍の濃厚液を穿孔内に注入するとよい。

これらのほか、ウメ・サクラ類の食葉性害虫としてめだつたものには、翅に黒い斑紋を散ら



写真-7 ヒメシロモンドクガの幼虫

し胸が黄色いやや大型のシャクガでツルウメモドキにも多いウメエダシャクや別名ツノケムシとよばれリンゴ、ボケ、クリなども加害する雑食性のヒメシロモンドクガがいる。同様に雑食性でサクラ、スモモのほかクリ、ナラ、シナノキ、ナナカマド、アカシデなども加害する淡緑色で扁平な楕円形をしたムラサキイラガなども眼につく。

(道南支場)